

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow

同じ高校で焼き物作りを学び、
今は同志として
伝統の技の継承に励んでいます。

尾張七宝職人

戸谷 航氏
廣井 聖資氏



Seiji Hiroi (左) / Wataru Totani (右)

ともに1985年愛知県生まれ。瀬戸窯業高等学校で焼き物作りの基礎を学んだ後、二人そろって職人の道を選び、名古屋に本店を構える「安藤七宝店」に入社。現在、伝統の技を継ぐために、日々飽くなき努力を続けている。

古代エジプトに起源を持つという、艶やかで華麗な七宝焼き。日本では江戸時代に尾張地方で隆盛を極め、「尾張七宝」と呼ばれた。今でもわが国を代表する焼き物の一つに数えられるが、焼き物の世界は機械化の進展により、現在の製造現場からは伝統色が薄れつつあるという。

そんな中で、尾張七宝の製造を全て手作業で行う老舗がある。その名は「安藤七宝店」。そこに伝統の技を継ごうと、切磋琢磨する二人の若者、廣井聖資さんと戸谷航さんがいた。同じ高校でともに焼き物作りを学んだ彼らは、それぞれ「銀線つけ」と「釉薬差し」という尾張七宝の製造工程の中でも重要な役割に挑んでいる。

一 「銀線つけ」を選んだきっかけは？

廣井「入社後、全ての製造工程を一通り経験したのですが、その中でも銀線つけが一番楽しいと思います、この技を究めようと決めました」

緻密な尾張七宝の模様。目を凝らして見ると、その輪郭は全て銀でできた線で形作られているのが分かる。ピセットを使い、高さ1ミリほどの銀線を下絵に合わせて曲げ、模様の輪郭を作る。そして花の球根から作った特殊なりのりを用い、銀線を器に垂直に立てていく。それは後に彩色を施すとき、釉薬が模様以外のところに流れ出すのを防ぐ堤防の役割も果たす。

今回、廣井さんが取り組むのは、宝石箱を彩る桜模様様の銀線つけ。小さな模様を銀線で作るのには容易ではない。銀線を下絵の線の内側に立てるか、それとも外側に立てるか、ミリ単位の違いで出来上がりの印象が変わるため、極め



二 「釉薬差し」はどのような作業？

て繊細な感覚が要求される。慎重を期して銀線つけを完了すると、戸谷さんにバトンを渡す。器を一度窯に入れて焼き、銀線を下地にしっかりと固定させたら、いよいよ釉薬差しが始まる。

戸谷「色ガラスを砕いて、粗い粉末にした釉薬で彩色していきます。彩色といっても、紙に絵の具で色付けするよ様な感覚でやると全然うまくいきません。独特の方法と感覚を身に付けるまで、かなり時間が掛かりましたね」

粗い砂のような釉薬は、通常の絵の具のように色と色が混ざり合わない。そのためぼかしを表現するには、色の濃さを変えたいくつもの釉薬を作らなければならない。

銀線で形作られた花びら一つ一つに、丁寧に釉薬を差す。それが終わると地色に移るが、こちらは明確な区切りがないため、ぼかしを付けるにもより慎重な手技が求められる。しかも作業は一度では終わらない。窯で焼くと釉薬は溶けて縮み、その厚みが銀線より低くなってしまう。そのため、銀線と釉薬の厚みが同じ高さになるまで、彩色と窯入れを3回ほど繰り返す。

懐かしくも美しい
日本の俳句

Heartful Haiku Poems

Vol.56

よき家や雀よろこぶ背戸の粟 芭蕉



イラスト ひらしみも

株にみゆる野菊刈萱

知足

元禄元年（二六八八）の秋、芭蕉は名古屋から鳴海（名古屋緑区）に入り、下郷知足亭に滞在した。屋号を千代倉という下郷家は文人墨客が往來する東海道屈指の名家で、その二代目である知足は当地における芭蕉の有力な門人であった。

掲げ渡す岨の編み橋霧こめて 安信

んで、まことによい家であることよ、という意。典拠とした本文に前書「賀新宅」とあって、新築落成祝賀の句であることがわかる。「背戸」は裏口とか家の裏手の意。当時の「粟」は米と同じく大切な食用作物であった。

師匠の祝意を受けて、弟子の知足はこのような短句（下の句）を添えた。刈り取った株（馬の飼料）の中に、野菊や刈萱がまじって見えるような田舎で恐縮です、と自分の住む土地を謙遜してみせたのだ。続けて寺島安信という弟子が、

投げ渡す岨の編み橋霧こめて 安信

と長句（上の句）を詠む。「岨」は険しい山の斜面で、「編み橋」は縄や蔓草を編んで架けた橋のことであるから、前句の遠景を描いて、鄙びた世界をさらに強調したのだろう。このように、芭蕉たちの文芸とは交互に付けつなぐ世界であった。作品は「千鳥掛」による。

東洋大学教授 谷地快一

日本の伝統・文化を継承する若者たち
「明日への扉」

わが国が世界に誇る、固有の伝統・文化の数々……。先人たちが築いてきた、その知恵や技を受け継ぐ若者たちがいる。夢を追いかけ日々研鑽する彼らの「ひた向きで真摯な姿」と普段の暮らしから垣間見える“素顔”をご紹介します。

MOVIE 動画コンテンツ「明日への扉」では、日本の伝統・文化を受け継ぐ若者たちの姿を、臨場感ある映像でご紹介。30人以上のバックナンバーがご覧になれます。

Web版 パソコンやタブレット型端末など各種デバイスでご覧になれます。
<http://www.athome.co.jp/tobira/>

TV ディスカバリーチャンネル(CS) Discovery CHANNEL
冠番組 「アットホーム presents 明日への扉」 放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中



「銀線つけ」「釉薬差し」いずれの工程においても師匠の鋭い指摘が入る。そのたびに修正を行い、より良い作品を目指す。そうして数日を掛けてようやく完成した作品は二人の目にとるように映ったのだろうか。

二 作品の出来栄についての感想は？

廣井「輪郭の見えない部分がいくつもあるのが気になります。模様を縁

取る精緻な銀線は、有線七宝の魅力の一つですからね。それがちゃんと見えないのは、器の曲線に添って上手に曲げられなかったために、銀線がデコボコしてしまっただけです」

戸谷「地色が薄くて、肝心の桜の模様をしっかりと引き立てていませんね。作業中に銀線が倒れたのを直さずに釉薬を差したため、銀線の輪郭がきれいで出ていないところも気になります。廣井さんにちゃんと直してもらえば良かった。後悔先に立たずですが」

できることなら、最初からやり直したい。そう口をそろえる二人に、師匠は「惜しいところもあるが、桜の柔らかい雰囲気をよく表している」とねぎらいの言葉をかけた。

課題は残るが、それはきつと、さらなる高みに上るためのバネとなるはずだ。同年代の若者として、優れた職人を目指す同志として、二人は互いに切磋琢磨しながら技を究めていくのだろう。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づこう。

取材を終えて

二人の師匠である柴田明さんはこの道50年の大ベテランで、数々の公募展で受賞している尾張七宝作りの第一人者です。そんな柴田さんが重視するのは図案の意図を読み解く力。それは言い換えるとセンスであり、センスを高めるためには職場以外でも、いろいろな経験をしなければならぬと一言。尾張七宝作りだけでなく、さまざまな分野の仕事に通じる至言に深くうなずかされました。

※2011年8月取材。掲載内容は取材当時のものです。



尾張七宝

金属製の下地に模様を施すことで生まれる、繊細で気品ある図柄が特徴の焼き物。その製法はさまざまだが、代表的なそれは「有線七宝」と呼ばれ、製造工程は「素地作り」「銀線つけ」「釉薬差し」「研磨」の4つに大別される。それぞれに高い技術を要するため、一般的には、各工程を専門の職人が請け負う。「安藤七宝店」は尾張七宝の元祖・梶常吉の孫を工場長に迎えて明治13年に創業された、宮内庁御用達の老舗。

